

極楽寺だより



2017(平成29)年8月号

発行所：極楽寺 (浄土真宗本願寺派) ☎759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

盆法会のご案内

極楽寺の盆法会が変わります

地球温暖化の影響でしようか、夏の

暑さが年々厳しくなっています。

外出もはばかられるような厳しさを考

え、下記のように盆法会の時間を変更す

ることにしました。

特に十五日は、これまで勤めていた

「魚法会」と共に、「全戦争犠牲者追

悼法要」を兼ねた『いのちを尊ぶ法

要』を勤修いたします。

お寺という空間で、仏さまに手を合わ

せながら、自らを振り返る時間は、生

きる上でとても大切な時間です。帰省し

れた方々と共に、どうぞご参拝下さい。

八月十四日(月)朝 九時より

盆法座

八月十五日(火)朝 九時より

いのちを尊ぶ法要

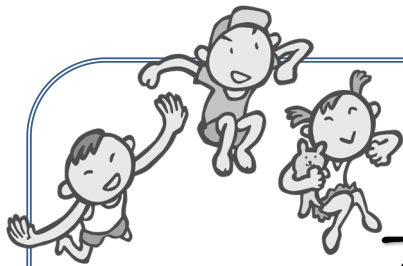
魚法会

全戦争犠牲者追悼法要

十五日の法要終了後、参拝者の皆さまと共に平和の鐘を撞きます。どなたでも、どうぞ。



法要の時間は、お勤めと法話を含めて、約一時間です。



お寺の子ども会 特別編
大津東組キッズサンガ
極楽寺にとまろう！

毎年恒例の大津東組主催、キッズサンガ。

今年は、極楽寺で開催いたします。

たくさんの方のご参加をお待ちしています！！

- ◇ 日 時 8月21日(月) 午後2時30分より
22日(火) 午後1時まで
- ◇ 対 象 小学3年生から中学生まで
泊りナシなら、低学年生もOK
- ◇ 会 費 1,500円(当日集めます)
- ◇ 申し込み&お問い合わせ お寺まで。



湯免温泉に
入ります

ご予約下さい

第54回三隅地区親鸞聖人鑽仰会法座

期日: 9月 11~12日 会場: 中村 報恩寺

講師: 安方哲爾 師 ※お寺で送迎致します。遠慮なくお申し出下さい。



極楽寺だより
エッセイ

オシエノ カケラ

声に出して、お念仏称えましょう
キャンペーン 第四弾

「あなたは、人間だ」



浄土真宗では、声に出してお念仏を称え

ることを、とても大切にします。そしてそれ

は、私が称えた念仏ではあるけれども、阿弥

陀様からの呼び声であると受け止めなさいと教えられるの

です。つまり、お念仏を称え、そのお念仏に込められた阿弥

陀様の呼び声を聞き、心を聞くのです。

小説家の星新一ほししんいちさんを、ご存知でしょうか。短編小説よ

りも更に短い小説、ショートショートの分野を開拓した、S

F作家の第一人者です。その星さんに『服を着たゾウ』とい

う作品があります。

ある催眠術師さいみんじゆつしがふざけて、動物園にいるゾウに催眠術

をかけました。↘

「お前はゾウではない。人間にんげんなのだ。人間の心を持ち、

人間として考え、人間の言葉が話せる。いいか、お前は

人間なのだ。」

催眠術師は、遊びのつもりでしたから、振り返かえることも

なく、その場を立ち去りました。しかし、ゾウには変化

が起こったのです。

「はて、どうして私は、こんなところにいるんだろう。

すぐに、ここから出なくては。」

檻おりのカギは、人間なら容易たやすく開けられるもの。人間だと

思い込んだゾウは、街まちに出ます。そして、まず洋服屋ようふくやに

入りました。

「裸はだかで外を歩くのはみっともないので、洋服が欲しいの

です。」

主人は、人間の言葉を話すゾウにビックリ。しかし、↙

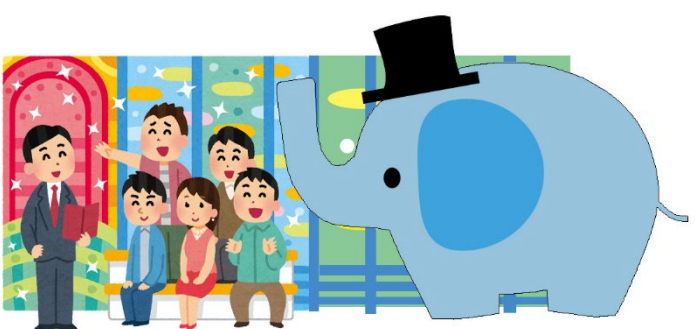
とても礼儀正しく、おとなしい。安心した主人は考えました。「これは何かの宣伝になるかもしれない。」

そこで、ゾウに合った特注の洋服を仕立て、知り合いの芸能プロダクションを紹介しました。

芸能プロの社長は、大喜びです。人の言葉をしゃべるゾウ。「これは、お金になりそうだ。」

こうして、ゾウはタレントに。すると、たちまち人気者になりました。急に売れ出したタレントは、すぐに天狗になりがちですが、このゾウの場合は、そうはなりません。熱心に仕事をし、くだらない遊びはせず、ひまがあると読書にふけます。ですから、お金もたまりました。

すると、「遊園地を経営しないか。」



という提案がありました。「やってみましょうか。」ゾウは社長になったのです。しかし、社長になっても威張ったりしません。部下には思いやりがあり、お客さんには心からのサービスをします。

当然、利益があがります。ゾウはその利益で、お菓子の会社や、おもちゃの会社も作りました。とても良心的な経営で、利益の中から、恵まれない人たちに、惜しげもなく寄付をしました。ゾウと会って話した人は、みなそのしっかりした考え方に敬服し、銀行も信用してお金を貸す。ゾウの会社は発展する一方です。

ある人がゾウに聞きました。

「あなたは、大変な成功をされました。その秘訣は、何でしょうか。」

「別に心当たりもありませんが、ムリに上げればひとつだけ。」

「それは、一体何でしょうか。」

「私の心の奥に、お前は人間だという声がひそんでいるのです。でも、人間とは何かが私にはよくわからなかった。そこで、本を読んで勉強し、考えたのです。人間とはどういふものか。人間なら、何をすべきか。常に学び、考え、その通りにしていただけです。私が世の役に立っているとすれば、このためかもしれません。あなた方は、自分が人間であると考えたことがありますか。」

指摘された質問者は口ごもりました。そういえば、そんなことは考えたこともない。

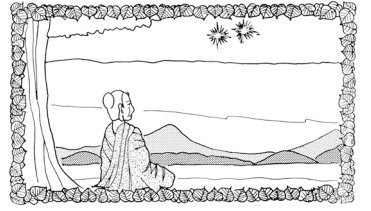
皆さんは、考えたことはありますか。私たちは、催眠術師にたのんで、「お前は人間だ」という催眠術をかけてもらった方がいいのかもしれない。

こんなお話です。ゾウはいつも「お前は人間だ」という心の声を聞きながら、「人間とは」「人間なら」と、考え続けました。心の声を聞くことで、導かれ、育てられたのです。

私たちの先輩方も、阿弥陀様の呼び声を聞きながら、導かれ、育てられ、人生を歩まれました。「人間とは」「人間なら」、それを阿弥陀様と相談しながら、歩むべき方向、求めるべきもの、真実の生き方を学ばれたのです。

催眠術にかけられる必要はありません。私たちは、すでに呼びかけられているのです。声に出してお念仏称えながら、お念仏に込められた阿弥陀様の呼び声を聞いていきたいものです。 ■





極楽寺揭示伝道 けいじでんどう



8月の言葉

「話し合い」の同義語（意味を同じくする語）として、「議論」「討論」「対話」というものがあげられます。

「議論」「討論」と言えば、『朝まで生テレビ』『ビートたけしのTVタックル』を始めとする数々の討論番組がありますが、最近どうも見る気がしなくなったというか、見るのがつらくなってきました。人の話を折り、割り込み、切り捨てる。他人の話は聞かず、自分の意見だけを言いつつ、どれほど反する証拠が示されても自説を絶対に撤回しない。マナー知らずで傲慢な罵り合いを、見ようという気持ちになれないのです。

このようなスタイルを、ディベートと言うそうです。↓

ディベートが流行り出していた頃、私も経験したことがあります。が、当時は、立場を変え、反対意見に立って討論するなど、「相手の立場で考えることで、多角的な視点を学ぶもの」として紹介されてきたはず。それがいつしか「相手をいかにやり込めるか」という技術を学ぶものへと変わり、今やこの有り様となってしまう。とても悲しいことです。

先日NHKで、新世代による討論番組『日本のジレンマ』を見ていました。その冒頭で批評家の大澤聡さんが、「ディベートとは、討論をしても自分の意見が変わってはいけないもの。でも、ダイアログ（対話）は、自分の意見が変わっていい。いや、変わる方が大切だ。この空間はディベート（舌戦）じゃない、ダイアログだよな？」といった発言をされていました。←



批評家 大澤 聡 氏

凝り固まった意見をぶつけ合うのではなく、人の意見に触発され、世界が広がり、見方が深まり、むしろ意見が変わることが大切なのだという発言に、「我が意を得たり！」と膝を打ちました。

この世には、絶対に正しい意見などありません。絶対に正しい人もいないでしょう。にも関わらず、「俺は正しい」「アイツは馬鹿だ」と罵り合っているはいないでしょうか。それは「話し合い」ではなく、「押し付け合い」です。私自身、深く反省させられるところなのですが。

ダイアログは、「対話」と訳されます。哲学者の鷲田清一さんは、

「ダイアログを通じて考えを変えらるとは、無節操に自説を曲げることではない。自分の考えを絶対視せず、別の視点・他者の視点からも考える複眼的な柔軟さを持つこと」

(『パラレルな知性』鷲田清一)

だと言われています。そこにこそ、冷静に相手の立場を気遣

いながら、説得したり、折り合いをつけたり、学んだりという、敬意・尊重が生まれてくるのでしょうか。やはり本当の「話し合い」とは、聞き合うことからしか始まらないのです。

もしも私が全て正しくて とても正しくて 周りを見れば
世にある限り全てのもは 私以外は間違いばかり (中略)
辛いだろうね その一日は 嫌いな人しか 出会えない
寒いだろうね その一生は 軽蔑だけしか 抱けない

『時代』『糸』など、数々の名曲を生み出される中島みゆきさんの『Nobody is Right』という歌の一節です。自分の正しさを絶対視するならば、同調する人は味方であとは敵。意見がすれ違えば味方も敵になる。そうなると、もう「嫌いな人しか 出会えない」「軽蔑だけしか 抱けない」、とても寒い人生になってしまいます。この世には、味方と敵しかいないというのは、あまりに薄く浅いもの見方でしょう。

学び合い、深め合う豊かな出遇いがあるのです。

浄土真宗では、「聞く」ことを、とても大切にします。

「聞く」ということは、「私はいつも正しいわけではない」という謙虚な姿勢からしか、始まりません。何より親鸞聖人が一生を通して貫かれた態度は、「竊に以みれば」

（『教行信証』総序・後序）ではないかと思うのです。これは、「わたしなりに考えてみると」と訳されますが、堂々と言い切ることへの躊躇いと謙虚さが感じられます。真実は、あくまでも阿弥陀如来にしかないのだと。

「仏意測りがたし。しかりといへども、

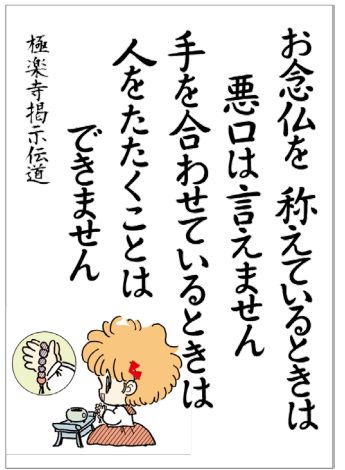
ひそかにこの心を推するに」『教行信証』信巻

仏さまの心は私にはとても測ることができない。けれども阿弥陀様のお心をわたしなりに受け取ってみると・・・という謙虚な態度が、凡夫という立場に在り続けられた親鸞聖人の生き方であり、だからこそ生涯を通して「聞く」

ことに徹していかれたのでしょうか。それは、聞いても、聞いても、聞ききれないほど広大無辺の世界と出遇われたということの裏返しでもあります。ですから浄土真宗では、親鸞聖人のことを教祖とは言いません。「我こそ真実だ」と言えないのが、この教えなのです。

何より、「我こそ真実だ」と言う人には注意した方が良いでしょう。いつしか絶対的服従の強要が始まり、気がつけば言いのりの人間になることを求められますから。■





7月の言葉

私は最近、「形」の大切さということをと、取り戻さなくてはならないのではないかと考えています。

私たちはこれまで、「形よりも心」だと、形を崩し、おろそかにしてきました。しかし同時に、形が失われることで、そこに込められた心も失われてきたようにも思うのです。

たとえば最近、ご飯を食べる時に、「いただきます」「ご馳走さま」が、聞こえなくなりました。ラーメン屋やファーストフード店では、まずお目にかかることはありません。

「いただく」とは、頭の上に置き拝むということです。

「ご馳走さま」とは、たくさんの方々が走りまわって

下さることで、このご飯が用意されたのだという感謝の思いが込められた作法です。

何より、「ご飯」ですよ。「飯」という字に、わざわざ「丁寧に」「ご（御）」をつけている。これは、我がいのちが、今日も養われるという深い意味を、一杯のご飯に見したからこそ、このような丁寧な言葉と形ができあがり、伝えられているのでしょう。ところが、「そんなことは、わかっているよ」と頭だけでわかった気になり、形を失うことで、その心まで見失われているのではないのでしょうか。

確かに、ご飯を作ってくれた人には感謝するし、おごってもらったら感謝する。しかし、「いただきます」「ご馳走さま」とは、そんな目に見えるだけの薄っぺらな世界への感謝ではありません。自分の思いを超えた大きな世界へ支えられ、生かされていることへの大きな驚きと、深い感動が込められた言葉なのです。

形があるから、心が伝わるのです。形があるからこそ、

迷った時に立ち戻ることもできるのです。

二〇一二年に亡くなられた十八代目中村勘三郎さんは、「型があるから、型破り。型がなければ、形無し」と言われたとか。

現代社会はまさに型（形）を見失うことで、大切なことを見失い、「形無し」（散々な。目も当てられないさま。）な時代になってはいないでしょうか。

私たちの先輩方は、手を合わせ、お念仏を称えることで、お念仏に込められた阿弥陀様の心を味わってこられました。まさに形を通して、育てられたのです。



漫画家の西原理恵子さんは、「子どもを悪口の壺の中に漬

けてはいけない」（『生きる力ってなんですか？』おおた



としまさと言われている。人の悪口を子どもの前で言うと、必ず同じように育つ。殴られて育った子どもは、必ず殴る大人が殴られる大人になる。虐待や貧困の連鎖はそうして続きます。

ならば、悪口を言うよりも、お念仏称えませんか。人を殴るよりも、手を合わせませんか。「形だけやって、何になる」なんて言わないで。

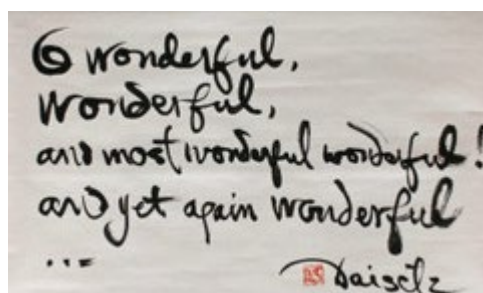
称えながら、手を合わせながら、お念仏に込められた阿弥陀様の願いを味わい、噛みしめる。形を通して、忘れていた大切なことを思い出す。形を通すからこそ、伝えられた心と出会うこともあるのです。敬いの「形」に漬けることで、心豊かな連鎖も続けられるのではないのでしょうか。「形」を通すからこそ、開かれる世界があることを、今こそ取り戻すべきだと、強く思っています。■

お寺からのお願い

お盆には、たくさんの方が納骨堂にお参りされます。参拝はご自由にされて結構ですが、くれぐれも火の後始末をお願いします。特に、続けてお参りされる場合、ろうソクの火を「次の人のために」と消さないままにされるところに、落とし穴が！結局つけっ放しで危険なことに。次の方に「ろうソクの火を消して下さいね」と、一言かけてあげていただけると、助かります。



□五月三十一日、京都・西本願寺で厳修されておりました、『伝灯奉告法要』（新しいご門主様の代がわりの法要）が、ご満座を迎えました。「伝灯」まさに、灯火を受け継ぐように、仏法は受け継がれてきたのでしょうか。人生を導いて下さる灯火を、大切に大切に守り伝えてこられた歴史があるからこそ、今私のところに教えが届けられてあるのです。だからこそ、この灯火を、絶やさずに伝えていかねばなりません。□三隅地区では、四月に伝灯奉告法要に参拝しました。そのまま、北陸へ旅して帰ってきたのですが、私が印象に残ったのは、金沢の「鈴木大拙記念館」です。鈴木大拙は、世界的に禅を広めた世界的な仏教哲学者で、浄土真宗との関わりも深い方です。□さて金沢でゲットしたのは、大拙の墨書の絵葉書。そこには「O wonderful, Wonderful, and most wonderful wonderful! and yet again wonderful」とありました。これはシェイクスピアの「お気にめすまま」の中のセリフで、「ああ、驚いた、驚いた、こんなに驚いたことはないくらい驚いた！それでもまだおどろきたりない…」という意味です。□まさに仏教の神髄とは、「驚き」なのでしょう。「驚く」とは、新たな感動と共に、これまでの自らのものの見方、考え方の小ささに気づかされることです。世界はもっと深く、もっと豊かである。そのことに驚きと感動をもって接していく。世界を小さく決めつけない。いや、決めつけようとする私を揺さぶり、導くはたらきを、仏法というのだと教えられました。きちんと受け止め、守り伝えねばならないと思うことです。
(住職)



平和の鐘を撞きまじらひ



八月十五日

午前九時よりのお勤め・法話終了後
午前十時過ぎから、始めます。

八月十五日は、終戦記念日。虚しく、悲しく、残酷な戦争は、昔の話ではありません。今でも
なお、世界中で続いています。戦争は、一部の政治家がするものではありません。価値観、空気な
ど、日常生活の積み重ねであり、延長線上にあるものなのです。

私たちの先輩方は、魚のいのちを奪わねば生きていけない悲しみと痛みの中で、「魚法会」を
勤めてこられました。痛みがあるということは、尊んでいることの裏返しです。しかし、今や「役
に立つか、お金になるか」でしか扱われなくなり、ついには人間さえも同様に扱う時代になりま
した。尊いいのちを奪い、いただきながら、生かされている。そのことに悲しみや痛みを感じる
ことがなかったら、いのちの重さがわからなくなります。それは周りのいのちだけではなく、自
らのいのちをも軽く扱うことになるのです。戦争も、その延長線上にあるのでしょうか。

阿弥陀様の光に照らされ、自らを振り返り、いのちの尊さを味わう。その思いと平和への願
いを、響き渡る鐘の音に重ね、周りのいのちを尊ぶ生き方の一歩としていく。そんな願いを込めて
います。どなたでも撞くことができますので、帰省された方々と共に、どうぞお参り下さい。

のばせ 野波瀬の皆さん、かね 突然鐘が鳴っても、おどろ 驚かないで下さいね。